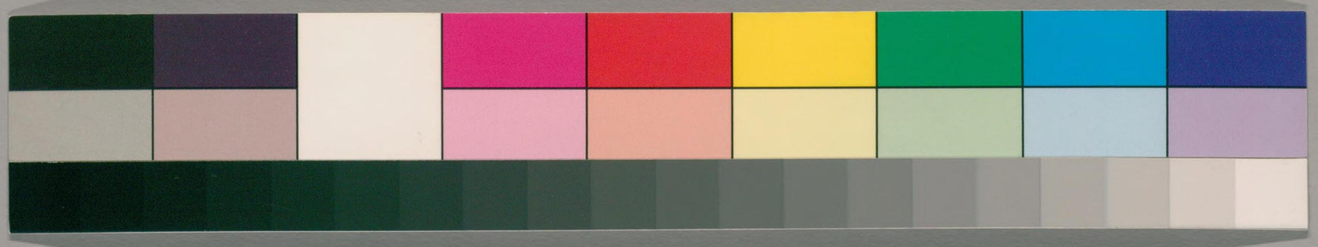
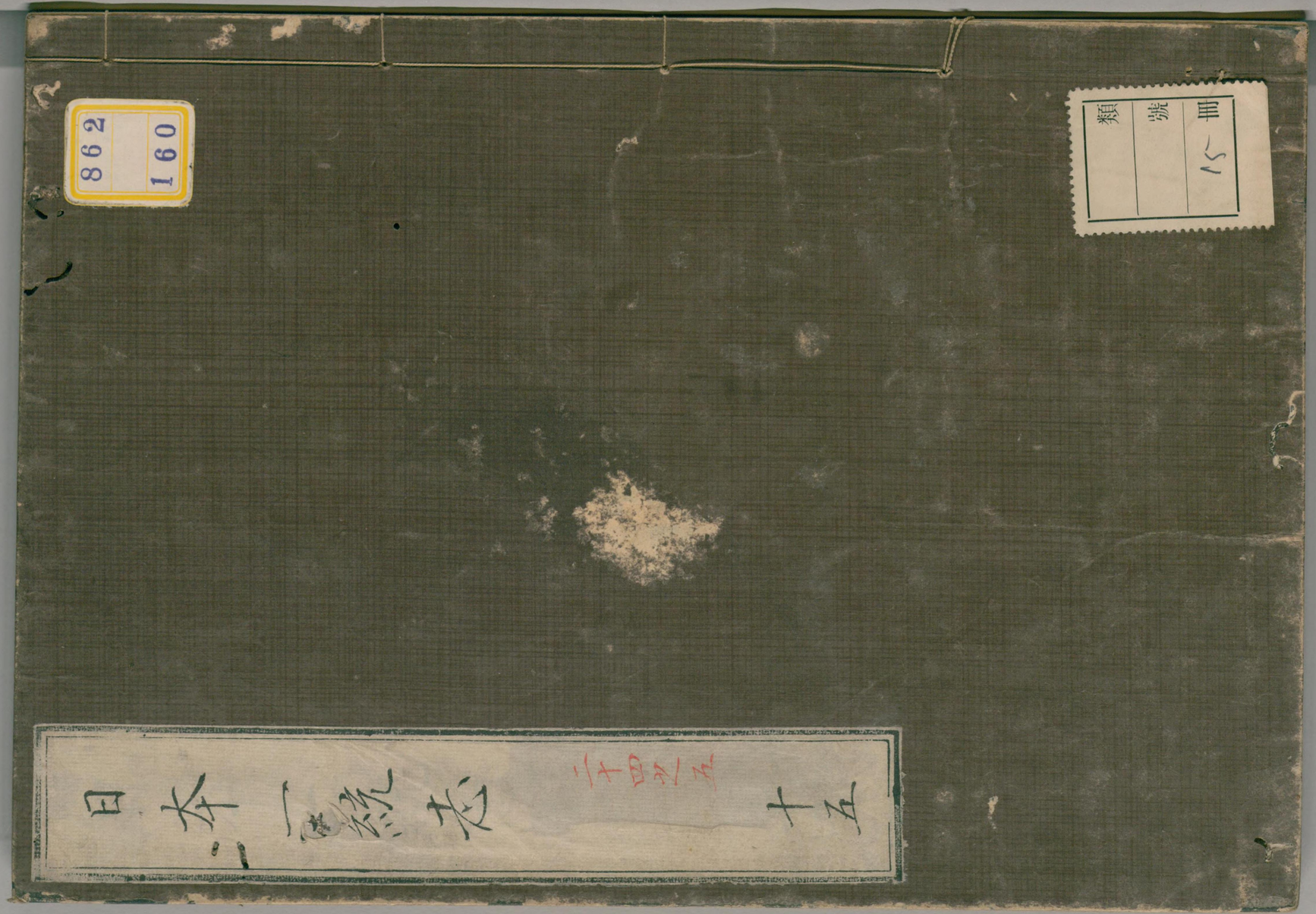




862
160

類
號
冊
ハ〜

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

日本一統志巻之二十四

目録

一 君臣協力共治天利長政事
一 所司前田家大平ヲ門京城中患入事
一 越城主秋月ヲ計小早川降矣事
一 所越井姫厥下離所行ヲ大領洋領ヲ事
一 芳蒲生忌賞希代ヲ事
一 彦山離不入守護厥下責岡ヲ事
一 所麓風神力攻入寇ヲ離矣ヲ事

福原達夫氏寄贈本
福原綾三郎氏記念図書
国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

一 羌汾捉書よ宮名徒和卒お調事
一 肥後国熊本ニ城退治ニ評定延ニ事
附 作ニ内藏介一人清合ニ事
羌熊本落城ニ武功ニ故肥後一条領ニ事
一 九列走雖麾随麾風ニ萬津ニ陣ニ事
附 大和中納言家藤堂源助ニ託ニ事
羌藤堂家ニ受領立ニ同運ニ事

日本一統志 巻之二十四

岩歌城攻事

附 高田家大平ノ原城中忠入事

かくて岩歌城攻ニ大将羽柴肥後守利長一方
二十のおなおひとよ押寄しかの小攻ニ手羽柴利
長の小攻ニ手ニ乃攻ニ（八生ひ）遠小六千斗ニ責上りニ勿論城近く三千小成
ニ寄まち新地をひとく対撃お出ーまふ程ニ利
長の小八百人斗ニ負おひ引ニ事ニ廿及進ニ急ふ
ニ利長の小姓上り大平左馬ニ忠ニ云若ひり

士ふ汀原兵庫分ヤ〳〵両人後合ーる大将の合
戦烈ーきまい櫛多い方のミ事も外く討入ーヤ
るも残念ながり本城へ引取ーい櫛多により近況ヤ文
言ミ一書ふーる書記ヤ花和寺も宿願ゆの一書ふと云
ハふーいかゝおとと後合せーかいたゞりヤる利
長へもふ十入右ミ支くの籠の上ふ流ミ吉況ふ被り
山中ふかゝすりーる合の風情ふもそれー答ふ
勢ミ前り生ふ本陣へ帰り投ミ妙ふ思云
寄ミ大将ミ迎合せ外ミ敵ふ利長下知ーて
蒲生飛運守ふ兵勇ふ自慢ふ仕有ヤるふヤる尚

多の面〳〵武辺かち者ミふ叶今日ふ石手同と
観念ーミ一情出ーふと奥生ふ逃免ハかま
者ふーと勾投〳〵進ミ登ふ沼くと妙ーりんヤする
家ふ櫛多の侍兵乃中ふ海雲乃者ふ取ー敵多
庫ミ云者大多ふ勾玉ふと一免ふ城主越井
訳中守押〳〵真方ハ櫛多ふ下知ーて呉よふるハーと
引勢炮の音雲草引碧ふ多おをき心事多進事
早ー櫛多ハ真方者ふ押崩ー石ふ投ミ海雲の者
ふふ逃せ〳〵内のミ逃ル者もミヤー外ミ後合ーミ
敵多庫ミ三十人計ふて櫛多ハ投ふ沼ヤ

侍ら前田家近辺に等しく押掛け捕らえ多くの石の
衆を投げ荒立ちて侍しかば重太郎大に立腹
ありし事なれば進み兼ねとふ所に大平左馬亟源
吾庵の両人捕手の外より樹木の枝葉等を押分
乃内に飛び入る処を逸速く両人窓より逃出
人別れ有の小屋に入るべき如くなれば
又侍の小屋に入るべき如くなれば大手八方に
くふ逃散小屋〳〵に居合女童斗和泉人ふ居小屋〳〵多
く捜しまい両人二ふ分ちて八ケ所に火を掛けしかば
山風烈しく吹立猛火天上ふ焔を揚ぐ大手捕手揉合
て敵の仕り様〳〵取入しかば城中大かれん気す数
汀原吾庵大平左馬亟両人捕手矢倉口を
捕手は乃一番宗和流花柔寺内大平左馬九郎源義廣
烈しく高声小呼つて名乗ける二ノ本戸返取入しか
ば敵も果しなく逃散ける大将越井都城寺を
逃去三十人余り石連捕手おく出ふ利長下
知しける為ふ逸ゆふ捕らんとて多
を揉ける中和一き進みたるやう雄の若武者芸和も
くしく奮戦かけ三十人余の者共の首を
利長乃侍先ずの二組が蕃花微塵ふ打破る

利長の馬廻迎へ掛ふむ其間ふかく討入越井
都甲与云ふ侍主従七八人
余を待迎へ
かくふるふ奥村助右衛門とて又十弐ハ父未熟ゆへ
なれハ度々奥村を指二用
又十弐築堵堅陣ゆゑかく如
下をいとも口惜思ひ若党三人津岡両人合連又
かもふの加恩の儀なんを豊前国迄利長
き府右を取て居るしかゆへ
や上馬ふるかへ敵漸くの大力ゆへ
き中ゝ苦掛ゝく越井都甲与おくれ
ひしふ迫ふかへ彼もゆふ力量ゆへ越井ハ奥内
者なれハいかゝ引下りゝく又十弐ハ
退んや思ひ入谷を
といへども岩放の返疑ふ駒次足乃踏不発ゝ
見れかゝ一十計谷下へふ引
おゝもふ敵ちきゝゝとメ
も草ゝゝか奥路ゝ立向ゝ迫合
利長ゝ思ひ入ゝ思小性共ゆ
なりゝゝ其ゝ引掛ゆ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

家の臣ら中の壮馬呈下の若士七八人谷へ
ふおくりて迎まい又十余り上ふ外の高き
往下か押通しく越中守又上みのくいまお注
両人集り策外を通ふ利隙故首お取事れふ次
上かれ下かたくく居るふ有ら御く八人の味方欠
ク一時い又十余下か城しか味方の者当事しか
安百首から取るくい異形をふ平愛れしと違通な
接るか朝ともか接るくく又いの行しるも接ちまい
行原ふ事滝のおとくく故難ロ汗流入と
迎へ朝治りしるふ接ふ下か清まお掛く朝の上ふ

越中守首お當るカ但せふ一生の力量を尽しるか
朝も合同砕るくれんたるくまおすり切ふ切前せしう
集り小浦くカ但せふおすり切進事新り頭一金程
切込しおおいかをしるまき)七去ぎしお魅并
越中守お討取一故秀吉ふ(黄金五十枚 忠光法橋物)感状添く
洋領しきふい大剣の武富名うやみるふや
ルり
岩成城中通ら者一人もれく城兵八百四十人鳴
津加ふ二千集くふ残兵お犯しルり秀吉方のま
ふめるの蒲生前田の両家士卒お犯二千多負立

千小越へとれり何方の
小浦く働しと走へ歌の中
毛小捉そ立すくふ死し生とるものそ岩小獨掛
赤小抱りく死し生とる者ニ百余人
小魚の城主秋月小早川小降伏す事
仍魚井娘厩下雛ち至嫁秋月事
共浦生忌賞希代の大領津領す事
生捕の女十一人をそ中小魚井越中守ら娘十八九斗
小く勝きく更くふるしな秀吉ら召仕空の内
ニの処秋月ニ言事如小魚といふも是小依し雑

死れまい築さ家の如き一軒
出来ら鴻津を退治し深ふも國ら帰る軍勢
多くいるるまこ名小中小ふ領村ま小見ら増田
右衛門尉ら黒田官衛淡合小早川隆景ら内ニ
合ニ引取小趣ら早く軍おくし
洞しきふ処秋月ニ言い元来小男小くふ悪量ル
しい富いありきり魚井越中守小娘ら亦養ら三ヶ
年小来ら奇ら奇しく魚井越中守小秋月小形ニ
云ふ男ル仰と娘も引共魚双乃容色生まい魚ら聲
をと小趣し故兼し江ら内ニ乱も来ら小魚井も

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

お犯し嬢を生捕と仰しかば秋月方へ小早川隆景が
和睦をなく早く実否を図取鳴津表の先
手を仕せよまよかし幸領の兵を遣をまと云ふ
をしかハ秋月源次郎と並ハ預け置て松寿を無井
に孫をと合壁ニ同生捕かゝる処中守嬢を奈
書ふらゝゝゝと云ふ漫々ハ入ふる文小早
川隆景ハ幸陣ニ帰り右ニ后中上ニ秀吉ふ報
嬢かをなく無井嬢を秀吉仰ふる石仕有なり秋
月書ふとハ武士の面目なふ女をふ預隆景と
をくハ秀吉方ニ代すふもなく汉早意ハ女房ふ

降参せふゝ云ふ仰ふり叶ハ
位月小早川お兄をゝ云ふ迎ニハ思ふゝ行云
支仕ふハ十方ゝ下ゝ上ニ雪吉
ゝ二千余も持ニ秋月三郎
分ふ眼前ふり支云ふ美女
形無ハ十度の策ふ陣ハ
持なゝねとゝをふふ秀吉
ハのゝ同仰廊すもいすれ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

御せ書かゝるの下ヤそくお疾きふかゝ秋月領上り
そ收まり姉おとゝろそつゝめ居かゝ小越ゝ明ケ掃
除ないろ〳〵く勢〳〵申上ケ幸庫ふゝ居ゝ枚ふと中上
小早川同道ゝて御同足の音秋月重寛の孫ゝ
第入ゝ献上せーかゝ陳のかゝ小越かゝおろくけ度ゝ
ら完り

一 三十二万石の御加増ゝ第後高倉ゝ五十二万
石ゝ
蒲生秀澤守戎卿

當台侍中紀き知の石ゝふゝ位官列松
ーゝ十八万石の上ゝけ藏ゝりてゝ一ゝ年
中小笠東の大國ゝすゝゝ空ふけ度の武
官四年大名の服衣ふ時の城責ゝふゝ原
いゝゝ〳〵

一 羽柴筑前守利長ゝ
一ケ國ふ賜下ゝ為守護ケ度仕ゝ方ゝ於氣禁
ゝ下ゝ思召ゝ同之
藏状の西ゝ
蒲生秀澤守申ゝ

一書ニ云
蒲生源左衛
蒲生四郎三郎
寺村善蔵
岡　左内
名護屋山三郎
高木助
神田清蔵
お茶筅守利長ノ内
大平左馬允
丁原与三郎
右の外諸陣の者共外種々の指物ありて
錢ら不及申七十人計り用ひ二日の昼る秋月ハ居城
小鹿石城陣ら移し是ら日ハ秋月城ら
少し走加ふ

彦山守護ふ入ハ云ひ伝ふ豊前ハ
乃慶長風神力攻入軍勢雑兵ら
共捉書をふらくら宮ら元徒和平相調事
彦山といふハ豊前の内ハ云ハ云豊前豊後
筑前三ヶ国へ懸掛りて高山と云慶所ふらく前平ら
守護ふ入の石山ハりて何方ハも届公家攻通
乃芦国司家ら申ふ仕諸国ら落安者共漸く
扶持ら亜申国筑紫ら遍ま者ハ欠退ハ（はてま）
ハ抱へ退ら亜ら申ら百ハ計ら彦山へ
歌幣すふてハめら七ハ故ハ今迄雅意ハ振ふ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

津山門小笠原國の名家也乃公を擇ひ幼
年より席を共にせしめ政事一切を委
ね給ふ恩澤厚し天下の守護
ふへしと言ひ下されし國司の禁中より居守護
ならん右大將家の若公武家を公中より天下
武將の掌握ならしめ給ふ制事幸ひ
生り津山ならんものを擇ひ給ふ行末
ならん伯父ぎみ幼年と雖ども津山の擇ひ幸ふ
侯三國の輔ひ一津山の城内熟有ん云ふ万策の
士卒ふくも津ふ豆とふ豆ふ免長袖の元

徒小笠武者拾万集り生るる行程の事すらと
ぬ万の歩ならく遅夜ひ一ならく責ん登ん風安
間ならん津山今迄山城政ん小ならく十位の勢ひ
津希代未曾有ぎまいふ小笠原兵自ら擾
れ一ならく一小當山源元と寄ひ云ふ及ぬ云
まらく迚叶ふ拾當山侯自ら津の大乱打ばいふ元
徒急く修理者ふく書常小ならく孫警ひ
老備八百人若ふれ千七百人其外浪人武者美遍
拾の数三千人ぬ都一かい幸堂へ集り谷ならん防戦の
ぬ多ぬすふ土石をふふ谷底めよく

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

名記すふ内か十行濃收寺と
ふ天王仁ま城ゐるも
弓秩地十挺斗ハ〻ー俗来一方の
出ーゃい谷行の流ーる亀ゐい山上道友ゝ智名ふく
い度豊後の府内か仏前表ゐ
乃前口彦山ゐ吸く降の
七八年も酒の香きまい和月朝日二日前後もふ和
か熟碑ーく岩敬前地の
和ゐる彦山ゐ等く責堂ふと云句ゐを
をるく一方の更ゑゐ方ゐい元徒元信
まゝ仏来ゐい歌の等ゝ詩辛ゐ掛ゝ向ふ校ふと

望ー故実ゝ劣れまい連ゐ八
九ゑ三百ゝ方俗ゝ仁王堂前井ゐものゝふ十方の
寺ゐい豊前国主ゐまい豊前馬ゝ鳴地主長野
三ゝゐ案内者ゐゝゝ豊後国主大友侍従
義統一万六千ゝ政日の更ゑ共ゐ四日ゐも降ゐ
の能ゐ武士ゐ真先ゐ押立ー中国ゐ仏ゝ方ゝ
残ゐ四日ゐ各雑和乃事れまい大ゝ仁王堂口の戦半ふ
城内ゐ遠巻ーゝ迫各戦ゐ中ゐ事ゐ定の四日
ゝも責入ゐーとの定ゝ
ゐふ天ゐ長野三ゐ大友義統ゐ降ふ長野

汁席蒲生家ヲ大功ノ伊沢
ノ連ノ事ハ古今ノ大将ヲ
ハシ上ともの云ハ平連ヲ
大ニ口ヲ責入ヲ大交一ヲ
ハシ上ヲ褒美ノ上鴻津屋
ヲん事ヲ云ノ上ノ大功ヲ
実ハ宿敵ニシテ遠ク行程
方ヲ万家ノ大宴ハ酔ん
ト云ヲ忠ヲノ初ヲ
ノ坊主ヲ招仁王堂ヲ
ヲ斯ノ如ク一時ヲ
も泊ク家入ヲハ武功ヲ
云合ノヤウ

角ヲ表ノ大手仁王堂ヲ
向ノ方ノ外坂中通ヲ坊
ハ薬ノ如ク弱兵ともヲ
セノヤトふ八家ヲノ
汁ハ上ヲ一息ノ
ヲ手ノ西ヲ方ヲ
ハ敵ハいふノ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

アレおろ云せおゝおゐまゝ
切ゝく入処ゟ迫ゟ伏ゝゝ
討止ーおゟーゝまゝ迫ゝ
死ゟ来ーゟ会ゟ方おゝ
を云ゐまゝ云ゟゝゟ
りゝゝおーもふ掃討せよ
奥ゟ遠ゟ味方のゟ勝おゝ
掛ゝおゝおゟーゝま山上道
童法ゟ着ーゝく奥寄ゟ
波寺と名云ゝ切ゝく入ゟ

後ゝ名ゟ掛ふ処ゟ後
奥の早ゟ事ゟ着ゝ
集り型ゟゟ切立ゝく走
ゝゟ方勢ノ國持ゟ陪来配振立
一人成ゝゟ包んゝおえま
ゟ七百人向上ーの岩山ゟ
走ゝ掛ゝ切立ーゟ又二の
ゟ是ゟ仏ふぬゟ云ゝゟ
掛ゝーお狂ふゟ四五丁の
ゟ南ゝ二室ゟまり向

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

教頭損一三十人余あるこれ亦無しれかゝおかるゝ事もる事なれぬふなを増れりと十次の是を知る百人目の首位者と是を長官我部七位守大なふ入祢らく責ぬきまゝ言公文をく押来ふ山上う傷ゆ遠くなり更勢な武官小ゝ思ふまふ大音上ちく名示を亀ハ十行預波守ゆおらく是ゆせよゝ唯り実之上りを七官我祢手の土位国り官次の次をく是ハ和十行度ハ教育内討死ゆゝ是しかねハ入ういかめふ官ちく敬方へ伴入う古々書ちの次振う指のゑしいふ心切と

名掛寺ふ津ふも十行う漢代の使力者ふ酒八年ゝ吾をく一日一夜死者ゆ更ちく楽しむ男ちしゆ十行預波守面ちも仮名も仍書きふハ使せしたゝ十行余ふ入設は之ゝ十行預波と文ゝ姉しく度の歌ふ外ふハ事ちも歌ふ下成ゝく走ちふな山上ゝ証ちく押伏せゆハ名ういかと同へハ是度よゝ更点ハちふ八年将者ちを過ふちくゝと中ゝ上作ゑちく是ちを速更成名ふ去れゝ百人目ゝ侍更しゆれまハ歌急せよと云ゆ者ちを過ちを速更名をゝ仍ふもは弟の仍ちく今又ゆちふ掛ハと云せもふ

敵首捕切る千六百人目の侍者一和も今ひるハ
八年樽峯右重ねハ〳〵十行陣の後ろ越す海三峯
小八余ると云へハ私着ると名れまいと大勢れまいふ友
を死と十度い首の真退し三十人余斗は入るめ十カ
石位切るしりぞく忙無果る侍へ引きりしい寄付の
山上道及れり
無八山上仁王堂口の退る後を寄手攻上りて戦ふ秀
山の元徒中張く武者午弱くり討死一五百の者共
勝寄ハ猥烟ハお寄ふ五口よりせめ〳〵攻入る
今ハ彦山破滅暇の内と思へし処ふ思ひ寄や魔風

一度ふ起る山中のゆる動天地ハ返す如く行魂と
矢せ果る弱兵の分ハ逃下きいおもふの寄
士云ふ面る居ふまよ行者云ふ知ら投着
〳〵よ第一ふくのふ彦山の五口を云つおとて
言もれ〳〵僅ふ内ハま云け時谷へ着陣せ〳〵者
手足ハ折生死ハ生の軍ハ千二百人ふ部ぶり
ぞや
伝ふ流石無ハ彦山の豊来坊と云ふ大将の
山狙ふ〳〵ハ迹へ生り雲吉住ふ方活連ふ大将れま
云け子住ふ寺僧ふ和ハ切ふ振舞

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

さる山城三乃守足祖の下もまい搭ふまぬ山
おかーやそく於茶屋をこはまし法使やそーそく春ふ山
乃元徒伸へは方なより衆同ゆきまをへーー支ゆ用ふ
くふ山ご墨亜へーやそも伊和睦をう入ーふ山伸の元徒之
角立書付洋里いるーー山伸ふ及郭多伊陳同ふ
いくも伊文了ヤこそー
一 肯寺法遺美猴ま平了仕事
一 對嫌國向後能美仕向ま事
一 元美判ら時三治成分別ゆハ取立ら屋編頭
ら徒堂ゆ立ヤ向ま事

一 思りこれ徒をこふくふ山ゆ押了ヤ事
一 老僧ゆ教云若輩ら元徒ゆ嫌題了ヤ事
十通ふくふく誓詞の文云ハ彦山の打云詞例ー了ら間
勝多ふ祖めちーー上よとれり伊ら元徒伸是ハかー
も雑美乃文云ふも能す山上ら為皇多ハ屋ふく
伊清ヤせーかハ悪くヤ同是迄いるーー迄之石く
屋生ーを同迄返三百程ら安ふくふく取固ミヤ度ら
首代やそーそく多よ一万両料是五万貫三百の内ふ石
上ら祖ゆの事ふくふく各ふ及是を能山伸ゆ押集め生ー
ふとれり是彦山固能ら伸ゆ祖ら教之

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

鴻津家老新納武蔵守ハ肥後國ヲ兼ノ一ヶ國
乃大将トシテ南ノ方ヘ云所ヲ立城ノ國中ノ
城々ヲ知シテ居ヲ置ク事十万ノ外ヲ立万ノ
ヲ南ノ方ヲ持ヘ攻落シ〻ク事ノ城〻ハ了
簡ヲ以テ押寄〻ル新納モ種ヶ鳴ヲ拵テ千
挺ヲ出シ亀ヲ造ル事多ク秘蔵ヲ
篇〻ル秀吉関〻白千挺ヲ上ハ三千ヲ味方
十万ノ内ヨリ集ルヨトテ信ノ
攻メ込〻ル二万八千挺ヲ
ヲ〻ル〻ヲ打出ス一万挺ノ一夜ノ内ニ

二度迄おせ〻まし〻ル南ノ城中聲ヲ揚テ
一者ヲ多ク出来城中大ニ騒ル事ヲ
ク八方戦ヲ了叶ヲ〻ク和
睦ヲ以書ヲ〻ク入ル
ル忠リ上京ヲ〻ク築ヲ築
ル〻秀次秀長秀康ヲ名代ト諸國ヲ中納〻故京
陽上洛ヲ〻ク早船ヲ〻ヲ
ヲ〻ク二度目ノ下向ノ者ハ
ヲ〻ヲ〻ク二度目ニ
ル事ノ武威ヲ忘ましク

北海国越中ニ城堡ヲ退治スル事

佐伯ヲ内應ノ一人ヲ誘合ス事

并越中前州武功ノ者以北陸ノ内北陸国小代行弥等

カクテ秀吉思ノ外ノ行弥ノ居城ノ旨ヲ聞モ感ノ心ヲ起シ

ノミナラス別儀野心ヲ含ム歟ノ如ク二重同国越中ノ如ク城ヲ

北陸ヲ武重ノ家老ヲ以テ招寄ノ後ヲ武

富足通ヲ年ノ案内者ヲ以テ度々ノ

巻戦争ヲ去年中ヨリ鴻津方ヲ成ク立ヲセ

ヲ彼一人ヲ計ヲ合働ヲキ事ヲ実ヲ風ヲ

思ヒヲ合ヲ誘ヒヲ攻ヲ攻ヲ擒ヲフ越中ノ

国富山城主佐々内應ノ

ヲヲ成ヲ是ヲ知ヲテヲヲヲ年中ノ事ヲ度ノ刻限ノ使書中

ヲノヲリ軍ヲ催促ノヲヲ

佐々事ヲ越中ヲ富山ヲ人

越ヲ知ヲ是ヲヲ佐々国馬ヲ中ヲヲ事ヲ三度ヲヲ是

ヲヲヲ是ヲヲ攻ヲ事ヲ秀士ノヲヲ

而ヲ佐々ヲヲ佐々ヲ連ヲ人数ノ千人ヲ

物の用かて立去ふなゝ
を一攻せそゝくふ叶ハ打
ヤゝ亮これをハ陣中
ゟまハ名むかゝ仕ゝ廃
く居如一然ハ之陣かも
除なゝ了ヤと名式付せ
在世の時ゟ富倉門か
而三年をふることゝ
七一ゝ安ハ客ふ吸ゟゝ
ハヤ事成一一戦の功なふ

秀吉ハ秋中一國の治りかて
文ゝくハ切の名かて教知
加ハ責落ての運領ハ
ハ城を枕ゝ了おれ
一放富村獨ハ滝三位建
も並居をふ中ゟり滝三位
ゟ行ふおうれヤ位の加かく
かくハれ一三百くそハ
を持行のこゝな事ゝまや
かおゆ情ゝ来二なかくも

まハ敵中一國の治りかて偏かくおー計の所ゆヤ
文ゝくハ切の名かて教知りもれーいけや越年ヤ
加ハ責落ての運領ハ立走ーかゝ家名ゝハ
十城を枕ゝ了おれいいヤ回きまハ佐との
一放富村獨ハ滝三位建就吾庫ヤ松永立備行き
も並居をふ中ゟり滝三位ヤ名ふハ吾ハ壮城事ハ
ゟ行ふおうれヤ位の加かく名ハ攻ヤ松ヤ我く頼き
かくハれ一三百くそハ責ハ後一ヤんか千ゝいふ幸
を持行のこゝな事ゝまや三田村いヤと云へハ三田村も行
かおゆ情ゝ来二なかくも責入屋一松永も了ゝ

家ハ人数ハ勿論ノ事ニ候ヘトモ
松永ヲ志ス事ハ多クハ諸侯五百八十人一方ハ兼ル体
内藤ノ大小収納ハ我運ヒ頼ラレ各夫程ノ事ニ
ノ御上ハ下妻領但シ御使中降シ候ヘハ
夫ハ知行ト申ス人数ノ事ニ候
数減ラス候ハ鴻津ト妻ノ領ノ
ハ人数ノ事ニ候ヘハ五百四十人ハカリ
ハカリハ大形ノ事ニ候ヘハ

然ルハ姫路ヘ参ハト云ヘハ姫十万石
陣定百事丈夫ノ働ヲ姫路ハ一番ノ押掛リ
姫十万石ノ家ハ元来志ラヌ者ハカリ
参ル者ハ云ハヘ物数ニモセヌ
ヘモ実石ノ中納言ノ云ハ
糟ハモ参ルヘシ鴻津ハ二度掛合ハ返事
トク居ヨト云ル不風ノ実石殿ハ初中納言ノ
御待ノ云ヘ大将台ノ机ハ
暫ク御ノ士大将ノ中ハ唐ク

取小豊浜の方内の如もそら着く鴻津中勢亟も退死
岩取如もそ取落皆教し小連之列一の大山谷の高山
退も庫策一気〳〵に策も秀吉の多く入り
と栗一かい流石如十方ちを命も肝越栗く如〳〵時代
〳〵ふく関白もや如将かも法ム家の土事
ふものかい如もさい如の勢ム言斗かとし〳〵と桜の破つく
思案宿中急やせん角やと実依亟くの度〳〵佐く
内蔵介如改十人栗乃小ふく孝せ一かとくふ
摂津のれるとくさ下墨そく成改如中ム使の立
そらやきふい佐く内蔵介と中者れり元来秀吉

さいふ今日さ次退侍堂かく孫か二三年次第い敬く
乃接取介度いな与をく氣さ陳かく誌如な
ら一芸迎かおのく素如一退恨の了教と思さく
乗りをふ有か當如の雲乃乗害ムと中如度の実乃乗
生る安雲の大将如介ム合く上方ム一庶お
をいる一一敬一小退宿ム当国かい鴻津ム即美
度と内蔵介半国充面介了了と方使一かい如十所
をふ十同當表の者ム武雲い退ふ退なくま云
智深をおも外北士れきいちふ収天のふとい事れり
百事寝く侍ム時ム取ム出おれせん

かとそくり思案をしてゐる所へ新斗八吉事也
城中の者共仕くと云合せ二百ばかり切て入上方
勢なれ共追散と頻に上っを怪しおまし城中には通り
ぬお浅八両浅かりと云ふを家老滝岡修
合急き取かへる程ならばなるまじ是八家
内藏介五人十人くれまい城中に吸入ともふ若干斗り
く教ばまた宗事もせぬ歟言の如く浅合しを
計策のお粗と両く浅合しを見合らう
成程は合体いるし一戦んの掛中へ仕事初事る
のなれまい大将仕くなとは通ある七八人くらきれ入

うろとやまい仕くと三田村滝松原まふ顔ばかり合
せしが内藏介通事去通有て長教若殿くは門番
城中かく仕様のまもすると家事共衆のうお
通うと云来い兼知いるし一百足軽と通事
や越く浜三田村勝右衛門通り我城へ
入と等(ひとし)く其の言共両人ばかり同名権右衛門
を名付かきへて一城十ふちを宿ばまく云歟
三位中ハおまい病の至りふうふ捕ハ入うと斯く
は供いるしふおしも忠う事外しとやまを云
三田村勝右言く内ふくれし城中ふもいかれの大力

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

量の富士をそく後なほ迄ふもいくら一時ハこゝなる
落の上ふ振返と云ふくれーと実体せてきい洋れく
ーくそ、おき掛ふそふくおそ合ん言雪の通れき会
智乃姫に入くい智略ゆもつく敵ハ拵く士の内一人
幸三ゑす權吉ももは江用ふ石把
生ふくへ訴りみふ生捕ふおそとも多赤ふ藩
ものゐをて迄とやくまい名古屋ゆれつく撰
士卒の切合ーハきハ汎もて来とゞ者れー
于支山地村(国ノなゝこ)久世村ゟ十ケ年ニ赤茅坊主ふ石把
生ふゐ(なゝこ)くお神ー宮ゑ治澤ふく南豊のろゐ

ん掛ー設通年ハ又助ふ号ーそ作く内廉ゟ馬母の
長老の跡へ入く取立迄ハやゝ号ふ者年の程も年
ふ通ハまゐも幕精者ふくくふ馬ふーそ押
立ともふ苦祖の者作りーかけ
ふ紹会私ふくそ成ふくそ新ふ
ふそかーも将中河まゝ一度ふ
ふて立ゑそふそ、おと敵ふく
生ふものかれ永善ゑ面立て
掛いふせかーと寿ふふふ生ハ
ゟ二のゐ宮生ふ岩庫ハゐ通ま立庫ふく宮度

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

抑頃年の冬くし又虜と成そらけらり永武公て
立子ともれ九かと年十歳の男子一人ともと年故
弥来るそ知け又助公くし日士ふえ立久世又助と号
し内蔵允云蔵允着そ大ねふ城くるも忠実ふ
云れかく一時の名誉武門の幸云ひ思へし任ふ
三国村落たつ凱三位松永尾張守並ひ弟玄仲
間士の内水船和平お土鈍蔵長老弘教寺権内ふ
ら立人三人等の力量もそ等通ふ誠へしふ同前
利の者ふれし仕打そ教実の処勿体ふ付り爰
又助云ふ八人城中ふ入多亀ハ初も住く内蔵介ふ城
多ふ事傷れしと収死走仆倒ふいさし神文了
仕ふそく城十余ともも人解そ思へし多ふ滝三位
死掛そ延ふ早く多係ふ
実住くふ城ふ深しそ降ふす
実ふ及ふ首刎落そ四方ふ眼そ立ふり
城内ふも大力量の早業と称法の枠過大通意先
掛そ住くふ思へし久世又助ふ生捕そ同しく按
を當そ虜とすふ双方ふ入ハ計り時ふ城
十余ともも家老祀間水月次三田村ふ中亀ハ計上ら
お法住くふいそし虜ふ引沿双方ふ雑引多き

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

勝負ハ後日ノ一戦の上ニテも當家
ふ久世又ハ忽ニ御等ノ内藏介ハ國ニ生捕ニする
城十郎左衛門を多数ニ討れハ七生迄の御當家ノ
秀吉へ引ニ軍ニ備へ引とヤハまい飛三位ハ
然ハ後日迄もなし仕ニ内藏介を城中ニ虜ニて
仕ニ置ふ上ニおゐても城十郎左衛門ニ等度ニ
ニ引ニまハ城内の者共やゝ一番ニ進ニと近寄
ニ飛三位卿ハ上ハ城十郎左衛門を仕ニ教
ニ云ハ城内の者共ニ待ニお止ふ事
ニ三田村勝右馬ノ助ニ後ニ引ニ
出ふニ告ニ後ニ引ニ城内の者共も
荒ニ仕ニおゐニハ十郎左衛門ニ
セニ引ニ飛三位卿ハ城十郎左衛門ニ
連来ニ実の大将仕ニ内藏介ニ
對ニ聞もれニ城内ニ使ハ
仕ニ引ニハいかニ其元ニ
者共の内藏介ハ又助と申ニ
ハ城十郎左衛門ニ
を左もれニハ城十郎左衛門ニ
ハニ飛三位卿ハ一命ハ
ハ城十郎左衛門ニ

ハぶ友力加内の者共教ふ
顧の者共九百人ゟ仕ふ
乞しハ仕ふ内藏介も加ヶ
ヶ入ゟ鴻津責日向ゟ
一人もふ矢千人計の仕ふ
事智宮業倚の故ゝ
ヶ事秀吉次の云流乞九剔の
かヶ度忠の中倚の者家康ゟ
築ハ第一統近ハゟ鴻津を
ヶ官重ふハ彼ま毛頼紀
ハん事ハかん思ふ降ゟせん事を振り
ゟふと同一事ハ思ふ時ハ九列の押へハ北平乃
大家と云豊後豊前二ヶ國乃主れまハ大友家ハて
鴻津をそ一ゟ押へふゟし進ハ仕方ハち一亜
了宜小ゟハお洗の和ハ家康様志ハ一ハ九列そ
ゟ仕ハ九列ゟ二ヶ國ゟ一加賀ゟふ大名ふそ
人数も集祖一ゟもの外ふゟくハち一亜ゟも書ゝ
ゟ角前ゟヶ上ゟ通仕ゟ内義分成双ハ北後國ハ
下ゟくハ淺一ゟ亜了忠ゟ北後國の義ハ昔ヶ九列
一番の六ヶ国ハゟ一換國の山ゟくハヶ年常

乃國主ら百日も逗留仕候間中
略〻〻伊陣〻〻添ふ又亂まて
諸大名の中小藩生死運守
吳雄ニお定〻藩生ハ
を以〻和治せ仕〻ハ西國の果ふ
東西の國〻重〻ふ
中〻同和平の儀ハ
所ふ定〻下ニ
のゆ係れふ〻〻
爭ひ〻再乙引ひ

拙者乃精〻ふ〻之別の
下野と名感変ふ
内務卿ふ
の事元来智富ふ
玉一〻近年の幹幾
波の大國一名ふ
ら治と〻此後國形
五十津領ニ
しニ
五ケ條の刑書ハ六月中

定

一 五十二人の國人如先規知行可相渡事
一 三年検地を遂ぐまじき事
一 百姓等に煩ひ所務の事
一 一揆ふ起仕かす遠慮すべき事
一 上方普請三年令免許事

右之条々お違背せば守十箇条に仍如件

天正十三年六月六日 秀吉(花押)

佐々内藏介殿

れを國郡の折紙を以て時代が順に拾弐冠ふ代家の大名古来が極機の名家には年号の年号の字を通が苗字の書下しは一字下げの字書下しは一字下げの一字下げ但し國主の分は行の頭より一人前へ行程の大名ふとも頭字なとは並へ書下しかれのとも將軍は名字とは名字の二字目とは家人の役名の頭字と同じ位ふ迫ふ元来のとは傍付は在中は十上ふり傍付は藤本のふいは下通が苗字の筆ふ立ふは諱は何と同じ位は家

人の名字歌と同一般から任事迄付え和年中
任さお定り宮永ります任命は実京も来京共
勅換と成年
之列毒雑麗迄家風鴻津江岸事
竹大和中納云家藤堂源助武略之事
芙蓉堂家受領立功闘運之事
四月十六日かい北度国越幸拠
广乱入之浮定之り小早川左馬体隆景了簡と
之生ける石代の大名は一人之之
ら建営遠巻かーと鴻津う矢の剛座ははちて
墨下迄之鴻津を程小之列毒くは廉なか廉き
之迄降と示もれく一却合生ふ武雲の裏言いま
浩の一戦か晴の討死か思云入ふか又とは幸陣間近く
は義の通めのふかは生ら一戦か運の勝負か試ふ十二
鴻津立と外〜お死と人撫〜
十倍十五倍い切崩一番闘まと
かハれそ小早川の中処ふ中と云事れ一番仁の将
生きい実白廉も実もと思
栗毒の北そ一処か幸体と

をも陣代ゞゝく出候し
ゐも土陣れり但一越年が一の
高内の一部〳〵の二百本八手ゝ
越軍の着例本六百八千余と〵
一ゝり百四十三ゝく圍取かゝく

一番　二千三百　別働南条勘左衛門
二番　千八百　垣屋伯耆守
三番　千二百　福原右馬助
四番　五千　宮部善祥坊
五番　三千　本多平右衛門

六番　千七百　亀井新十郎
都合一万五千六百余の一ゝ之ゝ薩广内ゟ乱入一
陣所取仕一大和中納言秀長の在陣其の間五十丁
を隔ゐ宮ゟ大和中納言なり人牧押ゝ奉行藤堂
源助秀長ゟ中止ふゐ之ゟ五十丁ゟ備ゝそゐゐ陣
ゞ寄り集きるゐゐ百一騎津家の者ゟ死仕交ゝそ
お出ゐゝ一ゝ之六傷ゝ而ゝゐふ残お死ゐゐ間ゐ後
をゟ等ゐ丁延ゝと中止ふ秀長ゟ名代
なきゐ其ゟ一ゝ引ゐ筒ゐ寄ゟ取ゐ
かもお軍好ふゐ仕其ゐ言ゐ秀吉名代室ゝ陣ゟ要

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

害かとて武威を示し
浩て軍の心掛ゝ
ゝ
ゝ

秀吉様幸ひ大入を庵様ハお百ものか運書れハ
急く討死せよとて沼津清付の弥五左も江州ま
で二百五千くハ合未だ後ろ殿ハ疲ミ
四月十七日の夜討か入り千死ハふかく一手〳〵のお
主份明五人のうれも

沼津義久　沼津将監　種子明淳二
まき先ミ言つ　お奥権右衛門
右五人うち将ふくうち備中向のハ一百五千くをふくお
入庵ミ将ふハよ奥奥庵衣義弘小一族衆先をミ
備二百五千くう残り一直上方ハ運強く急く運弱く

しく討死せハ押く記入ミ京伯か内返入立重く
二百五千の内ふく義久ミ吊合戦をせよとくミ命
ミの盛りく若手の野弥兵ハうの翁お破〳〵
再ふ立帰家ミ份別立出ふ替いかめし紀南条
小鴨ミ陣ハ一番かお入りかくミ返沼津ハ教くの作敗
ハくおふ事おミ思ふもふとな居ミりしかハ
大小奴涼りく討者ふ教知小鴨左衛門佐ミ福馬
小宗く出ハ南条ハ両度返〳〵戦りハ云
沼津ハの割い強く成ハ引返〳〵かハミも
ミ死返ふ南条小鴨かニ千三百のお千四五百くお

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

死しより二書の垣屋伯波守志ハしゝ文之伯しか
種々沼澤三ヶ所の秋地を以て初めの方
家れきいおれの忍しき玉ゑ垣屋波守四百斗おれ
秋地かゝく千八百くの垣屋伯波守志ハしゝ文之伯しか
けき其の所も三ヶ所多賀谷家かゝく逃退ら
福原右馬ゑ助千二百ゑ玉ゑく福原右馬ゑ助ハ
ら三ゑ三又の唐くゑ秋山百くハ一杯か突入ゑく突立
くきハ福原ゑ助ハこゑ将右馬ゑ助着馬し
ゑく懸ケ退切しかハこゑか福原勢ゑ小宮ゑ進入ゑく
切立ゝく宮部善祥坊ゑ平ゑ支亀井新十ゑ郎

切立ゑんと深ゑ追ゝか宮部善祥坊ゑ小宮
亀井新十郎ハ山中康ゑ助ゑ乞驚かせし程の雪士
れきハ文ゑ引ゑく秀長の幸陣近ゑ押前ゑくハ生生
ふ甲斐ハれし一切死か死ゑとゑ多の者ゑゑ知しく
宮部亀井ゑ六千七百の内一足もゑす戦ふ共勢ゑ
首ゑ落ゑれく悪くゑ遠ゑゑ死敵ゑ切伏きハ共
者ゑ切倒しゑく通ふゑ追ひかゑ死ゑ寄ゑれき
ハ精力の義ゑ事近ゑ手ゑ双ゑ疲寄れり流石の過
津勢ゑ切抜かゑく時刻ゑ移ゑ敵ゑ小宮福原
敵の中ゑ松浦ゑ兵部ゑ百九十九歳の若者ゑ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

お落しゝ大臺か御ふく人形なおふく宮初ゝ皆の中
を大家の通ふとゝく押通しかゝ皆共をかゝふ宮初
源助五十の祝ひ米分通事ふと岡のまゝ人ゝ言祝
言の宴ゝちを國ゝ等まて押ふく高名せよとゝく揉ふ
初ゝ皆の前ゝまゝ走着しかゝ百人のゝう秋旭を二
旭か立ゝく一旭八一町まゝか伏兵のゝく扣へ返まふ
河津分お三百挺ゝ藤堂源助真先ゝゝおよ
一千人の若手の者共ハ鴻庫坂の方の林の中

を迂ゝく後ゝ切ゝく入ゝ藤堂源助ハ討死もまゝ
死もふ掛合云の事叶ふゝく下和の理勝負ゝ中ゝ
流石大宮の河津坂も後陣の新手繰ゝ出ゝ
退座の仁出ゝ処ゝ藤堂源助ゝ高上ゝく泳ゝ
人押寄ゝ一番ハ蒲生新云ハ大和中納言
奉行衆堂源助高原ゝ名乗ゝかゝ宮
部善祥坊も勢ゝ出ゝく百ゝ追ゝ河津方
忽松庵ゝ云ま一ゝ三ゝ討取ゝ秋旭ゝ文ゝ引退せ
義久勢ゝゝ追ゝ処林の中ゝ生ふ藤堂衆
ゝ下知の千人勢ゝ呼上ゝく鴻庫の後ゝ

入しかいけさせ一同かしこまり
津将監と種々論淳二義之の馬
お兵糧も更而くなりしくうち
らけきき上方勢も二倍かくて七千余の手勢ろ
れり

十月のお功ら伝くて藤堂源助三百貫の
知行一一秀吉より一万石のそくて藤堂
佐渡守よりかしい実白秀吉より大和中納言
ら沸のかに養美ろくく今晩の名誉な覚
美ろ一故其根元ら為覚源助れまいかと

取立のおしも又宜かれ

日本一統志 巻二十四

日本一統志巻之二十五

目録

一福岡書房女歌ヲ龍造寺没収ノ高野山ニ奉納ノ書籍秀吉公ニ献ズル事

一鴻津家琉球國ヲ攻ル事

一琉王尚氏ノ佞神風琉球ヲ敎ル事

一琉津ヲ死ヲ為ス定ル家臣依テ殉死ノ事

福岡書彦太歌ヶ龍造寺を討取候形事

竹高野山年行ヶ書籍田之次第書之事

芸之別大小名領地高ヶ凡遠之事

安小福岡彦太郎一書ヶ曰久入道宗龍と
元弟北肥前国住ヶ龍造寺政虎方ヶ逐電し
来ると云ヘ云政虎小先書状の智
政家こく家智ヶ於ヶ下候程の器量と云龍造
寺政虎事ヶ年五十小載ヘく海内の溢も者ヶ
しかい嫌ヶいへとも違ふ云入割高ヶ鍋嶋の逆者

竹原下雅之宅ヶ逐電和談之事

芸藩之和平ヶ対候竹原城配分之事

一 将軍義之儲機ヶ於ヶ寺僧ヶ遊遊事

竹於ヶ茶屋松浦二ふ之儲ヶ於ヶ危事

芸小西法之ふ竹勇自是ヶ取立之事

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

かゝる時分に依て孫江をへまいり教まの幸
ありまことに拙き舞入と号し諸人あまた
所しかも云ふ事迄立合勝事ふかしぎなる
仕舞ひ帰らぬ時分雨ふりそゝぎ西国ぜんと
悪の歌雨ふり入道ゆかりの仏面ぐるかお果ちと
口説四条工支せしが先ず香之入道ゆかりの
雨春ヶ嶺小恋入てすおかしき山の栗実もすゝ降ふ
ハ長句ふ和しくいかゞれり元来龍造寺の家と
改虎頭立ち先年築紫探題こしき小栗家が
内一重生ふ温山紀好る国治の子孫佐賀の城主

ゞしく里利家ゟも付く出仕しゝ石ゟうし処久まも
家乃丁元若いが国法が改ゞ諸の家ゟ修理亮
雪舟和尚の改道ゟ入かゝ国柄が同しくして温山の家
かも地内ゟ龍造寺ゞゝく一ヶ寺ゞゝ建常ゟ護座が
修りしふゟ中比の城主の清倍い一代ゞゝかゝ祭り
ふ宜ゞゝ修験の行力実国めが居並書帯かゝく
龍造寺が住職せし処自然と北希一ヶ国の領地と成て
支配乃山林大小合ゝ二千八百余ゞゝの軍ゟも
ゆゝしく後かゝ龍造寺と云ゝく一方の大将かゝ祭り然か
天文の末乃温山皮切よりゝく国国いかの城主福原

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

辛ち恵つ清久當家の家事ハいへとも宰小野経房
乃孫ふるく近代當家乃長男成隆文先ハ屋敷の
の知ち宰前權守経清のふ見れまい寺中諸ふまい
親ふ了処とヤもなり(ひこ)ふ(ひこ)ふ(ひこ)ふ

止んと思ひ〳〵尚ゝ更よとみの柄よりは掛ゝて其序は
立しか実は再迎の法事と云語の内か偏国は紀ノ
理は給かせ一事は其まゝ報ゝて止ふ者もあふゝ
と立ゝ帰り支ゝ法事ゝ立り其時ゝ
龍造寺政庸佐賀の城主取ゝ死ゝの合戦ゝ毎度不
勝と云事ゝ二千八百の御ゝ
山伏五百ゝ集りしかは
の武初のゝ中肩ゝ並ふ者ゝ
荒嬢の政庸ゝ政家ゝ
もふ告といゝ云伐ゝか嬢
か嫉福岡寿ゝ方ゝ係りしゝ
中の山伏の中ゝ書春ゝ樹の
処ゝ

薩摩ゝ　大行院法下
神崎ゝ　明王坊
蓮池ゝ　民部法下
和泉　宮内
いかい山ゝ修行ゝ無宗ゝ国の高山ゝ
所れゝ依ゝ法ゝ
入ゝ教害せよゝ頼ゝ

修行の侍かく道の空入かおそと披露して六月上旬
国許を立ちて吉春ヶ嶽小城元事ヶ山上の忍ヶ
松を通ふかりの者ハ一人もふ通ひいて云修験者
ともと年ヶ通一ふ事ハまいハ大手ヶ忍ヶ曲の方ニ
云かゝ差通り侍ふて一夜ともに忍ヶ源
竜山とてふ芦庄ヶ酒宴ハすふ事
古今の指例ともまいハ吉之入道もヶ札の向者とハふ和
ふて名僧達ハ死をせよとやう侍ふ夜か入ふて人声り
ふハ見侍ふ一四人のまかも神壱
侍下ハ修行者ともくかふ侍ふ事ハ鳥のとくかふ侍ふ事ハ私

越ふて忍宮内大行院ハ引入雑れふて雷久入道う寝
間ニ入て云教ふ首ハ取ふて庭中の事ハまいハ案内も
知ふり棚手ニの谷の門ヶ走ふりふハ和ふものゝ
夜明方ハ松ふ栗立ふか行者の業ともふ和ふ谷
の門ハ扉よふ一本落ふりふハ指ふ通ふか常の人ヶ
持ふる扉よふハふ通ふ梵字ハ書ふふふハ和
夜前のハ修行者ヶ仕業ハふふふハ種ふ変ぜふか
其根ハふ和ふ聲ふる猶岡秀吉方ふ告ハふを
入道の娘ハ彦女方ハ侍通ふ人ハまいハ次の外熟ふふ
夫猶岡ハ

赤間ヶ関の陣中に女房来りて文を取
父の仇敵人と云ひかも是ぞと思ひ定めて
不意打ちをなし子細を討ち取りて
支配乃者ども一元龍造寺隆信と
討ち取るべしと幸ふ福岡城
輝元の本国の大軍が卒に
の陣中が打入るふ計り私の迷惑をまぬかれ
指て敵討ん事が難ふく稀幸が難ましけ
寄陣ぐまするもの
石屋の陣中のふ龍造寺なおく入る度ら

手向をーと云ーが女房涙を
宮ふものかれ龍造寺ふ恩義事が
く他人の多か掛り合が矢ん事も計りなし一時ふ
我く幸云れーと云涙きふ芸也雪の金沢福岡ふく書
か云事が兼くせす忠孝の二ツのふくいかく行まず童
ー孝も天命成と云ーと云会難と生着ー言立ちふ
斗ふくふ仇返も知行が中史ふ居ふ武士ら永ふり
恩が更ふ所忠の重ね事古今同一陣が難と云ふ
れー縁の切れまふ是が涙ふく思が忘まふする
時ら富士の幸云かーのふ次ふく神ふ兼ふ仏ふる

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

書の房女福岡ノ脈ヲ乞ク藝列ニ侍ラ振ーク
一ク花木國ニ忠行ク仕奉ノ
女ノ事ヲ聞キ小浜ニ石ラ仁ノ庵ニ登ヲ國中ノ安ヲ
庶ノ入ヲ地ヲノ子何ノ事ニ
雑色ノ打音龍造寺政庸ハ同國ノ麻生宣興杉原
十房ホヲ尓ー合セ吉方ニ降ラセンカ海津方ヘ
下行ノヲノお法ノ事合ヒ
ク女ク許ヲ仕奉ノ
ふヲ迎ラより姑ーク来包ヲ
迎ヲより天三十五年六月十日ノ暮掛ラ打音ヲ会

龍造寺馬上ノ足ヲク
乃書状ヲ奉ヲ何カもせよ
中ヲラ若堂ヲ来ヲ右ノ通ヲ
文ノ理ヲ云二言ラ去ー行会龍宝ハ音通ク雑
いヲーヲク龍宝ノ同ク侍中ニ云ヒ龍造寺ヲ
おくふヲ去ヲふ言中ーヲや主ヲ
か告ヘーき教ノ要量ノ
ヲ中間通ヲ事ヲ書ヲ一同通ヲー
能ク通ヲ事ヲ話ヲ彦女馬ノ例ノ事ヲ
ヲ通ヲ書ヲ入ヲ慶ノ娘ヲ龍造寺所ノ
洩ーヲと龍ラ葉方ヲ福岡方ノ家所ノ行ヲ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

避けをしめさむとおもひまふさくに龍と山城ふるまひ
ふるを教ほれ〳〵事春ふ終ひ猶後し敬ふ用ひ義ふなり
ふり出家ませしめ活りもふ放龍造寺ふ免ふ角係と
ふおひ近りく〳〵ふ寺へ伴ふ
ふり帯りふと云ふくふ伏ふ宿早場ふ生く
寺の疲まし伏揃いくふ井ふ
件の大ふ伏ふく龍の歌ふ
ふわふく落し吉馬ふお
云大ふ驚り傷もふ知如
りと仕賀の城ふ矢まふく
を始ふし〳〵ふく押有ふ力ふふく知もふ〳〵と矢出しふ山ふ
ふく百四五十人の者ふふら追着しふい姫ふ女ふ行
知ふふもい洞院倉同前の事れまい疲ま果し故ふ
分ふふくい徒ふ虜ふ出〳〵と山中ふ馬ふ指矢へ
ふふ思ふやい彦女ふ豊前坊の仮ふ書ふ人通ふ素
と契りふ迎し故出生せし
廉風原ま吹原ふく龍造寺ふ近と近ふふ
勢炮ふ放し山ふ延んとせしふ却ふく教ふ物資
の形のもの出ふく竜造ふ谷ふ元ふく投抓と
製き寺ふ好倒しふく郎ふ近搭仮

りしが此人竜造寺政虎と相変の女房と化して
よく教しと共に云舛一ヶ月ふと夫が産まれ初て
豊前岡田と云ふく飯食ひ一食ふ
もふ及ーふく親の許なおをる事偏ふ天神地祇
の感応かも有ふおうと云くり逃ハ夫の福分産ま
神而逃龍造寺政虎前ゆふ天ーふく持ふり女房
と福岡ふ方ふ前ゆ投出ー男とーふくおかふな我
如斯計せり親の許なり討ふ異よと頼をけ〳〵患
なの二つを云舛かー用ふ立ける男来行の用ふ
せてーおう方ふり去んん事ハれんとハ思ーふ男ふ
ふ実なふうハ去んふ吾ふ云ふ産ふ福岡彦右衛門後
夫かふれーふ雑ふせーおふ伝我腹妊男ゆふハ持せて
きてーふれふハ一ヶ月右ふふなふく立ーかハ彦右衛門
果ふやき志ハーふふ親りと云ハ程来千
ふといへいかふ〳〵再ふもふ入書春ヶ窩の車
加ふ立帰り家ふの中ふ源介の者ハ残り居りふ
二十ふ斗ふ仕ふく整ふ年の天正十六年正月出産せー
彦男ふ設福岡方ふ老ーふ乳もふ吾由長ーふく
毛利の家ふ福岡ふふ産ふ之の女届ゆり右の彦
女ハ春春ヶ窩ふ行方ふ知ーや天正十六年暮中秀

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

吉は事の関及好多加ら國はゆるく云行方知
ら亦代の女れり亮山の豊あ好の種引きい亮よ占も
頂ましやふ思ゆれりしむ
実石秀吉八代白梅頂いし辺暮方小高野重一く
一通の書ゆ持ち一是ゆちしかい亮行方を
安くも五名ゆふ云申ゆ波行い知きやてふく
ふ友ら実な事れり辺さ雲小何方白りしやふ知依く
右の頂実白厨白中止しかい亮ゆ波んらふ
小井中宣治未定せかちや辺一く後書れり天下乃
えを関れり国のえを我れり実教得ゆやうやし

軍ゆ好こ天下の士民乃命を失ふ事数千あやや
我の心離き教きくやをゆ矢い誰や云小天下ゆ治
のふを化石ふ辺やふやや先年秋か朝夕任世せ
物潰王大仁かしく薄辺の深り天下ゆ治一事
ご又項羽連ふしく教得ゆ好こ士民ゆ教一名
を高皆へのくを落せしかい天下のくを小肯意くに
伝ゆ失ひしかい万丈ふ當の富ともや一朝ふ
五の命ゆ失ひ皆若邪せしかちゆのごとせし
注事を常く治り安せまくをしかい早くも云きや
そのかふ氣ゆ之ら国ハ白年皆ら一丘武藤ふよ

りく偉業をふかくも敬ふ子は年く敬十万の
士卒を催促し政体事ふて仰やふ仁をり乱き大
仁かく治ふ事百千歳も預る云ひ形ふて憂ふ
乞列の大小名幸領安堵の和平を納まる高津の家も
天下云双の名家将軍云統の古儀かりかーも欠署
れく三ヶ国の任なるく早く兵馬を治の帰治ーるし
近年の地震の変災を悪くはず一く云ふかーそ
大任を職かいるり一くの御奉祀なりく天下の士卒を
慶ふーるふん事を地理悪の設かり天下の吉凶を
考へ等民安全の功なを唱くまくる孫長久ふる

一吾一せふかーそ第一二年家ぬちん
事雪佛の如何春日敬拝のふ祖ーそ吉家ぬちん
一分の奪(あおぐ)かーそ先祖一のふ祖ーそ吉家ぬちん
摸ふれー吾家をおくろふ君の改過賠和ふ迎ふか
如くれまい波濤を渡ふ今行ふて涙ふれく童
乃旅遠ふ下死んれー仍ふ一毫の伸ふ十万のふ
送ふと書ふり
仍ふ共教誨ふ大ーかふ行まぬ考ふて迎ふふ本箱
か云のとくに年の果ふ返も二残不知治ふ課せんとす
ふをふくの所かーそ大ふ思ふ定ふ

豊臣より祐筆八人ゟ
書状之ふ
一 只今返歌対をれ一ら参ふ事
早く存上結目の禮をお述ゝ
お遣ゝるお事分愈ゝ
但一天下ゟ平の事ゟ
詠吉れ一若し芳ゟ
朝歌ゟほの上ゟふ
天下国家ゟ対一ゟ
平一統の吉ゟ
平ゟお遣者ゝ

めし一郡ゟ二百ヶ所ゝ二百枚
各ゟ迄ゟ扣ハ幸領安堵
小楷ゟ家ゟ朝歌ゟれ
すふ事一ふ扣とみ一
吉程ゟ立花左近将監一書ゟ御禮として
ほちゟ馬黄金百枚持
ゟゝ支ゟ把ゝ築ゟ名四十三歌五ゟの同ゟ国
是ゟ年ゟれゟ金銀ゟ
語同ゟ金銀ゟ
生ふ処ゟ度吉ゟ

築の内もあまた混の金を張りうり事すと中
合り一度も矢の射掛敵射の大石丸中八一万石乃
高かりく黄金百枚宛とも書れり富初ゟ歌
射せけふくゝとくんさかと俵ゟ五萬俵籾甘な
始メこゝく度の御国史の国除かく雑ゟ
各知行高の城おゝく十分一五分一丸か書出し
丸八まく退去高を退く當世小所ゟ
秀吉の方石某ふ大小名寺家社家大石性か辺ふ
よくも於まく小国孫ゟ上ゝ処か
黄金二万八千三百枚
御馬石古文

御五万三千枚
料足三十七万貫
御籐御三百本腰
其外石御教仰不知国くか御
御幸陳ゝと宛御奉行高就
なし
高麗家琉球國ゟ加勢ゟ
御奇矣ゝ依神風琉球兵
共乗吉ゟ御時船大湯日
依て高麗家ゟ定ゝ御国
御羅三百八十万
織物百枚三千本
御幸御陣向ふまし
兵船よ次教事
御馬向走ゟ入ほ事
御国御禮十上澤ゟ

政こ思召し迎一向其のはれ
くゝ弥ゝ御一向ゝ好とよ
ア の 四千代の流か添そ
実石成は陣ぬ
般入り
二石の内ゝ五十石着
積上り雪吉より
米を儀金一両
ゞそ一ゝ毎日ゝ二石
ゝ康る鳴の
ふハ
かゝ
ゑ
一日ゝと鳴津
その
了迎や家ゝ立
生り云家石ゝ失
出せしゝ移津

ムしく發行せんとは情しけれ琉球國
如き從來航海者の目的地にあらざる亀ぞ
指流球國のごとき有くも如斯
兩度かくも延引し漸上三百里かくも
かくも易着船の有れまいまし
定く十日の内外を要するを二度
球人如き八十日の如きを有く甚だ
く上方筈が憂目が遣せ足しー
出ー亀不早來四日目が走着しー
進上ー八百斤内外五百十三斤のくなきー高津が好き

きー生ふ施始次矢の異の有持く百八十俵の米
有京く押出しをふか寄吉の運漕船又を住吉
小船くいく十三艘の三神丸が上く清上の利
運船新し故ら琉球船百里程出ふと言悪風吹
着く百八十俵の船不くいく高砂
島ちん吹きしか薩摩を来ふ事ふ無
行事官の示をふ名和泊遣を積ける船五俵
鴻津家和睦の沖繩清ふ三日が廉ら鳥ら
吹着し故空ふ和しく琉球かも書物ふく
沖縄何の使ふ来しきりやく披露しきる

丁未ノ紀念ノ爲メ吉ノ大利時ヲ待チ
退キ
新ニ宮石風ヲ種ニ浮宅ヲ
出仕シテ步禮申上ラル
鴻津ヨリハ毎〻ノ異
格ヲ以テ入ラレ一和ヲ含ム
ヲ以テ
ヲ以テ向十度津ノ氣ヲ
大阪表ヨリお入ラレ龍造寺改家ヲ
ヤシテ施行ノ爲メ
ヲふエシテ
ヲ以テ向十度津ノ氣ヲ
大阪表ヨリお入ラレ龍造寺改家ヲ
ヤシテ施行ノ爲メ

家人

羽柴筑前守　秀吉
長谷川（ギヤウヘン）　秀一
高氏部ノ輔　光利
治田信春　秀政

十萬五千騎

四向表ヨリ

羽柴兵部大輔　秀勝　岸奉行
羽柴加賀守　利家
羽柴越中守　前田利家
木下　吉隆
羽柴三左衛門尉　長吉
羽柴兵庫頭　秀次
羽柴左衛門督　秀勝
羽柴宰相中將　秀保
羽柴侍從　秀俊
羽柴侍從　秀家
羽柴侍從　秀勝

共に筆紙に尽し難く都合五百余人五月廿日五ツ半寺
お立口向表口押寄鴻津宮野村高知迎后備
山際の細かく多痛く一戦をも〳〵待懸〳〵
か野村か書を先年治中喜徳〳〵家のくく
困くに教立せ〳〵御清兵の高知迎后備
めし沢彦の作かく迷ひ〳〵なる動迎集中見
初のこか馬ふお守せ作をく喜ぶ〳〵年月の程を
芸深き迎常れ〳〵けり〳〵かい事書か居をく重々り

いと尽き迎ぬ凍くく鴻津のくく迎も始終ふて叶
秀吉の極宮生ふ処ぬ宅ぬ宅ぬ早くをり
のをもきいかくく未付迎も天下か称美もすれ〳〵
早く降参ろくく家ぬ立夫婦俗老の節ぬ生涯快く
せん事くく何の幸ふかおぬと泣死くぬ別の情ぬ
情しく亀敬野村も迎ふらの富士れきをも着の
御かハまで宮小伝宮ぬ立深〳〵をり云鴻津勢
疲くく降参なのふハ益の事れりをくく速ふ幸ふり
方ぬ降伏ぬ迎くく一ぬのぬ銘もれ〳〵山持の如ぬ宅〳〵
かハ宅ぬ原も休義か薄書ぬ発明をし上れきハ降

[illegible]
[illegible]
[illegible]

向一七百人の大軍ふ発ぶよ奪汀湯ふ降しまし
七ヶ国をくまふ入しい多の王子
係ふ味方の忠清付恩顧の雑兵面く斗死ぶ会
かせん空欲ふ計れり退ろくし倩事ぶ考ふ頼朝ふ
未熟ろま家名ぶ一旦の恕りふ怙悪く油こ
せんハ先祖石のふ孝一教ふ
実石のまはぶ兼ふ忘給ぶ
天下の大権ぶ掌握せふ書
退くふ迄くく運一石も
然と理解書一ヤまいハ列座の面く十ふ

いて同了然ふ琉球國のかなちて同遠芝ハ於く秀吉
の運号ふ當ふ空と退くくあぶこにふ中故義久倉秀
久の庫頭忠辛庵を立ろく好某院新納両人ふ招化
秀吉も希く板ぶ入ろ中処當家ふ用しろ楼當
ふ使れろく而厚ぶよく一上ヶ
云之く次早く両人の内一人ふ
加板了仕ふ向ぶ接使ヶ史首ぶ了お度義久をそし
免名免許の内意了ヶ清との事故両人感心しろく
俵野源三お郷方ふ立越石の通ヶ達し亀い志ぎ
の和平を一人の元次原下ぶ嬢ふ行い迎本村當使ぶ

を秀加へ右の旨披露しきふを秀吉は悦ら実石
横面帰と勾り生ふ事なち将義久の出浴国へ
逃ん思ふ辛かち切抜らりん趣ちれ
生ふ義久を抜切ふせよ義久の首は思芽投が
数すると言ふ故本村宮内当介実ハ伊達の海
い作かく宝之のかねふりく羽津う武力から握
退座ーらく和平事ーといふ
首実検ふ芽ふ故すとき
ふ故はなふお宛
ふ処ふ浅野弾正ふかきふハ彼立ふむかち
なるふ会迎もはえなふ大仁の徒化かはやる

鴻津の一族ふ残ぢ宝処ふハ彼軍も市支所ふ
余りすかと迷辛ち分神妙ふ上ぢ慶美ふ思辛
生害もぢ用意すと積善の家ふち案慶を
ぞかち戦国とやれかふ十度の策ふ陣ふも
敢時方討死用もふ当事ふ芽ハ庵ぢ打ち
ふ孫のかもふち思ふぢ仁ふすて依和をとふハ
秀吉も弾正ふ疫生預れりふ依行事対面せんハ
余りと忘曲和ふとぢ背投晴かるくはえーかハ
浅野弾正ふ芽ふ処ふ思ふ多津方ふち
ふく当方ふハ十分のぢ慶当ふ芽ふすて和斗と

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

ら卜故丁但吾言ことろ〻淺野淳三新納的當
行葉院を先り通しほ不ら至の候相叶〻こと之達て
告ヶ初新納かヤきふとけよい砌のほなきもて
同ま〻行云ふ〻ふ福ふもろ〻行ハ一ちい宗教をほと
ら如義之かとほ候居もろくほ子是い義弘ほ家
智丁ふ〻吾止かい義久ほ落髪もろくほ對面成
ろ〻秀吉も列こほ痛まおんしほ重ほ云云
丁ヤ是い秀吉勇るほしし是ろ〻行云来一分
乃なき天下数の名家かふ〻行いけ後秀吉ほ彩
言ひよ成ほ之の事ホも執権ろヤ柱かとの事

ヤ故れ〻と来かヤ誠ま一都故新納氏藏守至抱
兼代のろく居立吾候義久ら中達一ろふおお
淺野生乃丁偏希一勿論家督義廣(ふろあつて)小候ま
一法体のふんの生ろ早速判發一衣
を着一ろく出仕の旨か極まい返事の如ふ御
士七人同一く判發一懐中ホ短刀ふ候一者随
ヤ一ち手寺ら丁お出仕すふ
完ふ淺野家のる孫盤居も長政生涯書
ふ落ろ慶の如ふ扱記の所人なら敗一事行
万くろ云事をしらひ吉徳る孫ふ勢ふ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

然ハ湯庫御理運更義久ニも利勢深長の御ことゆゑ
秀吉の本陣大平寺近く迄ニ而ハ御用なり今日実ニ
ハ御用なり今日実ニ御用ニ而ハ大平寺ニ而ハ
対面下さるべき様ニ御取扱ひ被成候ハ
ば秀吉ハ御帰陣被成候ハ、御用ニ而ハ
若侍ともニ義久の次ニ御用取ニメ〳〵ニ而ハ
ら〳〵出かと各見給〳〵ニ而ハ御用ニ而ハ
秀吉ハ〳〵ニ而ハ立ニ而ハ
ハ御用ニ而ハ湯庫のまゝ
ご迄〳〵ニ義久ニも御実ニ秀吉の顔ハ度々
手ニ而ハ〳〵ニもなりぬ斗の顔ニハ
駿河ニ而ハ御帰陣被成候ハ
秀吉ハ〳〵ニ而ハ実義久ニ而ハ
利勢の御神妙〳〵ニ而ハ
これより薩野源三ニ而ハ
義久ニ仕ニ而ハ
ニ而ハ

島津家　島庫頭忠平
嫡孫　中務大輔家久

薩摩変後平

鴻津家代の家老ハ
　好義高変　　幸田美濃守　　幸田本野守
　幸田　　大内　勤役ノ節　野村喜庵忠
名ヲ石出ナル共改メ七ツ石重上ケ国ノ加行割ヲ
仕立薩摩国ヨリ鴻津幸家ノ加領前ノ如ク大隅
八郡ノ内七郡与庫領地ノ一郡ヲ実石ヲ減入
二郡ヲ共庫収又市ヶ二郡ヲ新知或藏守ヨリ
鴻津市出ス本法ニ
　但シ十万石ノ内ノ一郡早速清算ヲ以テ処
　分秀吉公市国ヨリ移ノ節代支　ヒトキノマヽ

一郡ヲ清算了ヤトモ幸津家ガヤハ田畑
ノ地ヲ縮ノヤニ百ハ廃ヽ仕方ヤ
ヤモ藏入カト代支　ヒトキノマヽ　田畑ヲヽヽ
地カトヤ好ナ立百石程一郡ヲヽヽ
連帯ハ清算ヲ案内ヲ
故一石米ヲ通ノ
格ヽヤヽ処和ハ
藏入カ和ヽ清算ヲ
鴻津幸家ノ加領斗
代ノヤヲ公ヲ依ヽ後日琉球ヲ

小入之事付而ハ三百石と申之ハ無之
候哉之段ハ其時之
ものにや

鳴海義久儀名護屋ニ於而妄筆仕候事
附於伏見屋敷ニ而歌かるた之義仕事
并小西清之亭ニ而御前之御自慢仕候事
関白秀吉与薩摩表一統ニ
可義の宮の山中雑木かるく
彼都ニ
旧事古来の大社かるく
くふるきよし度々神も御
とや
伊紀云々上
伊勢ニ
結図如件
伊信州の
伊東信を云々
屋敷立鳴海義久一無

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

忌ふかき義久と一旦和睦といへども十度秀吉等
と云陣文申領ぜお遠ごの給連ふくの内一郡
や宮ばかり亜産所領とそ
く羽康家の事ば思出し
思ひより大隅薩摩の國の
お急南を我一所ば指く
天下ぜ主の乱世と成く童
ふてもとの工夫かく
奥そふ岩山ば築屋ば捜つ
突落ら組おかとの秋斗かく

ごそく。當年十七歳カハ名列士双の若者ぜもも
義久例ばふ教ら戦場にいはる出ぜ事ればまい
知ふ者ふてそ奴一人ば
く安乐寺の岩屋ば新造の築屋ば立く実石殿
を詩文ぜり拵け岩屋ハ先
ば楼居の物常ば祀ぜそ岩上ふく岩の地ば
離まそく向ば生出ぜ事ば丈ふく
岩れり東西小二方各数十丈の
く上ば天飯山とそ祖の工
なりけ岩上ぜり思まい唐也思ひく京ぜ

双の絶景ともいふべし岡石厳も又遥々宮本長次郎
云へる処取切右の士ながらきり思ひ立ちて
来りしかと云ひ終らず思ひ入りたる
色小腰より奪ひ抜き様も見えず厳石を
切払ひ突立ち勇み進みかゝりしと見えし
京北亭竹の内迄山路〳〵と中上りの早くも登
り来りふもとの休み茶屋に三人ながら腰打掛ふ
残暑かなをそく酒肴ども義久独り
〳〵酒飲み肴美を盡し〳〵とて乃上の岩屋に宴数ふ什
物重箱かくの如し陣中の旁ゆゑ

又休酒盛をへ〳〵とて故ふ残和もく数十ケ所の
茶小入岩屋に集り古今珍らかなる
茶事もふてうと早酒宴のもてなし
の市茶屋にて義久市茶内とへ迎長沢
かに石成当吉利山岩神高住吉屋宗智以上五人
かく歩り〳〵道遠しのふけ時小雨如清八元来
高くれり〳〵と降くる市ふ入け度も氣遣ふ根運
送の竹宮三人の内かく市休いへ〳〵市休の言も
市務事の胴労ゆ組の竹宮夜お勧今ゆも葉近
歩り〳〵に実石厳共ゆは御元中斗かく安ふるの

岩屋に參津かの茶屋なる
は茶内のく早二三ぎもぐらせるふ中間と云ま
篇ふるふ風情のく誰かの通行の内徒然草三之
ふ段ふ行と走出くく匂りくくまでいとも名殘ぬ振ーく
酒盛着遊返小文入ちふくくも入ちふ西かた
与振り悩ちよ代なかふ思ましくく
立所出せーまかふ奴かれと思はまる数まるて
誰をくは記かす茶と云者れーー小西如清平公
揉くも思ふ有ら悴小西主計君父ら孝次き
もの成ーかいふ今日若原るの酒盛ふも仏ふ移

ーくくぐは有ら寿り父如清う例ら事ふと筆ーく
件の旨ら沿りくまいふうる原下の岩屋のは茶沿
よ吾之手長旅の船中雑風ふ逢く當國ら次首
ー御被船の荷物ら西迎る洞教ら還面ーく岩
屋ら也ーかーふ老人の挺山場かなく次第更晩ら
今日返ら歌とりーー好津なの仏中も計かとく
早くと中せーかいふ主計ふ篇ら行とやらん今日
如神ーく所仏ふ被依ふ酒盛の場へも三至ーく
茶とり父よの仏原下ら也伝の當ふかれかく
はくやまれかくもみくも岩屋ら也はーく

抑此両事ハ民間の中ニ有ても元来文清兵術ニ
如精ト云ハ〻高家ニ有ても愛翼の利徳ハ考ヘ
堀の津ニ有ても大概の所ニ有ても
高一ニ知ル人ハ少ク其種ハ多ク
ニ於テハ武士ニ非ラン事ハ
十二歳より南方ハ百ニ歴ル
百ト云カ如キ家業ハ
を深ミ陳文如精も
如キ仁ものをと武家吏ヲ

代官ハ多ク如精ニ仕ハ蒙リ万事勘矢大軍ノ
諸事を是ニ従ヒ候ものニ候ハ主計も
ニ候ハ同地ニ有ル間ハ
云ハ芸未ダ多ハ仕ル程の事もれく
ニハ武芸ハ熟一ハ
をハ下ニおゐ一ニ
ト思ヒ込一事ハ
伴奉ニハも遠ト一人の

吉成ふ岩屋のけ茶屋に安らふ着くう
しかい秀吉乃運お續小西
寺ふ
廻い岩屋の中乃け茶屋ふとも鴻津方が松浦三ふ當
一くけー亜け侍儘仕ぞいへ
もけふーくふ亜弥文美藻の小くれまい秀吉け言
なまい義久小性う能名量れうこと宣れかふけ茶
屋ふ入ふせらふ義久と松浦ふ同配しくそう
け言ねとふ中くけ酒ふ儘秀吉行ふれく
岩のとれへけ出とふ。(おも)殊景小ふ
唐口年一眺望ことけ桟敷能死
集り鶏近くト小牧十丈の山
け座ふ松浦三ふ岩屋かくはふくは
足けりの処ふ松浦三ふ乃衛ふ
秀吉ふ言茶ふ小性牧亭
宣れかふ松浦うふ
ふ風呂ふ殺りへ死侍ふ
ふ乳ふ羽津の小性元け用ふ

秀吉度明れふけ牧智のけ生故は心自ま宣ハ
是ふ落うて京着迄ハ一走ふ二宣三
足けりの処ふ松浦三ふ乃衛ふ
秀吉ふ言茶ふ小性牧亭
宣れかふ松浦うふ
ふ風呂ふ殺りへ死侍ふ
ふ乳ふ羽津の小性元け用ふ
唐口年一眺望ことけ桟敷能死
集り鶏近くト小牧十丈の山
け座ふ松浦三ふ岩屋かくはふくは
足けりの処ふ松浦三ふ乃衛ふ
秀吉ふ言茶ふ小性牧亭
宣れかふ松浦うふ
ふ風呂ふ殺りへ死侍ふ
ふ乳ふ羽津の小性元け用ふ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

牧かう小松殿か延ひらくに招ようんこせしか盤石ひ
如くふ動しかいすいや知まおよと思しか事仕損し
くいとい画角力の好よかうに引かや頁ら投かる事屋ひ
伸に投入しい適ロ次の角力も加の場か切ね御しよち
秀吉は逸ら城恐しい心性小西ら成系かく角力
を出しまり僕の酒毒かる弱解しかこはひねら死
立せのふいは言い義久は筆ね御ふうしく葦ふ
かくり業指しくら高しかく小西主計事つく義久
のらね系ねくい。順ら業と一度かといかね実石屋も
石よりまかせしは無ね出しくら亭主は焼扱ふ

きいいかと引立しかい大力かこうらま是死ね盛
のるくふ残出しふ始終小西例か春くまちわる
いいく一書小義ら石ひ了事頁迎つ故大力れまこも
松浦子ら来流石岩掌故義久の例ふ放は能ふいる局利を仕竜住
吉屋の家督和知者の武士剛ふふ生故実ふく
岩屋口ら出くく遠仰祖迎ふ指ふきいは小性駅福岡右馬允師前祖の跡
ふいきいは小性駅福岡右馬允師前祖の跡
右馬ふ頁両人一書早く駆ふ和か仰ふしくまい
義久ふ支度お遣しちふとれり急きふ告

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

心中の一おかしく まこゝろ
おく底ひ義久ら ゟ 濃ゝ
の拙ゝと ゝ 仕ゝ ゟ 立ゟ
筆内ゝ ゟ 立中 ゝ 雇ゝ
かゟ 合ゝ 拙ゝ 言ひ 秀吉 ゟ
なおゝふ ゝ ゝ 若元のお
ゝゝ ゟ 通ゝ ゝ ゟ 松浦
小西なゟんふ叶 ゟ 帰 浪
ゝゝ ゝ 知年々の武
とゝく 文如清 ゝ
義久 ゝ 言の ゟ んふ
ふの ゝ の行と 思ゝふ
ゟ 案内下仕ゝ 思ゝく ゟ
く 受の ゝ 惜かゝ お浩ゝ
ゟ ゝ 雇 ゟ 帰ゝ ゟ
上妙 ゝ 乗れく 延一挙
ゝ 志 底ゝ 文新 近静
挿 ゝ ゝ 義久 ゝ
一 ゝ ゝ 無 ゝ 名再
かゝ なの ゟ 立 ゝ おゝ

義久 ゝ 言の ゟ んふ ゝ 島義
ふの ゝ の行と 思ゝふ ゝ 之列 ゟ 延 ゝ の内 ゝ
ゟ 案内下仕ゝ 思ゝく ゟ 陣中 ゝ 殘(おゝこゝ) ゝ 帰ゝ
く 受の ゝ 惜かゝ お浩ゝ ゟ ゝ 雇 ゟ 帰ゝ ゟ
ゟ ゝ 上妙 ゝ 乗れく 延一挙 ゝ 故秀吉 ゝ
志 底ゝ 文新 近静 ゝ の上 ゝ 底岩屋乃
挿 ゝ ゝ 義久 ゝ 一 ゝ ゝ 無 ゝ 名再
かゝ なの ゟ 立 ゝ おゝ ゝ ゟ 志

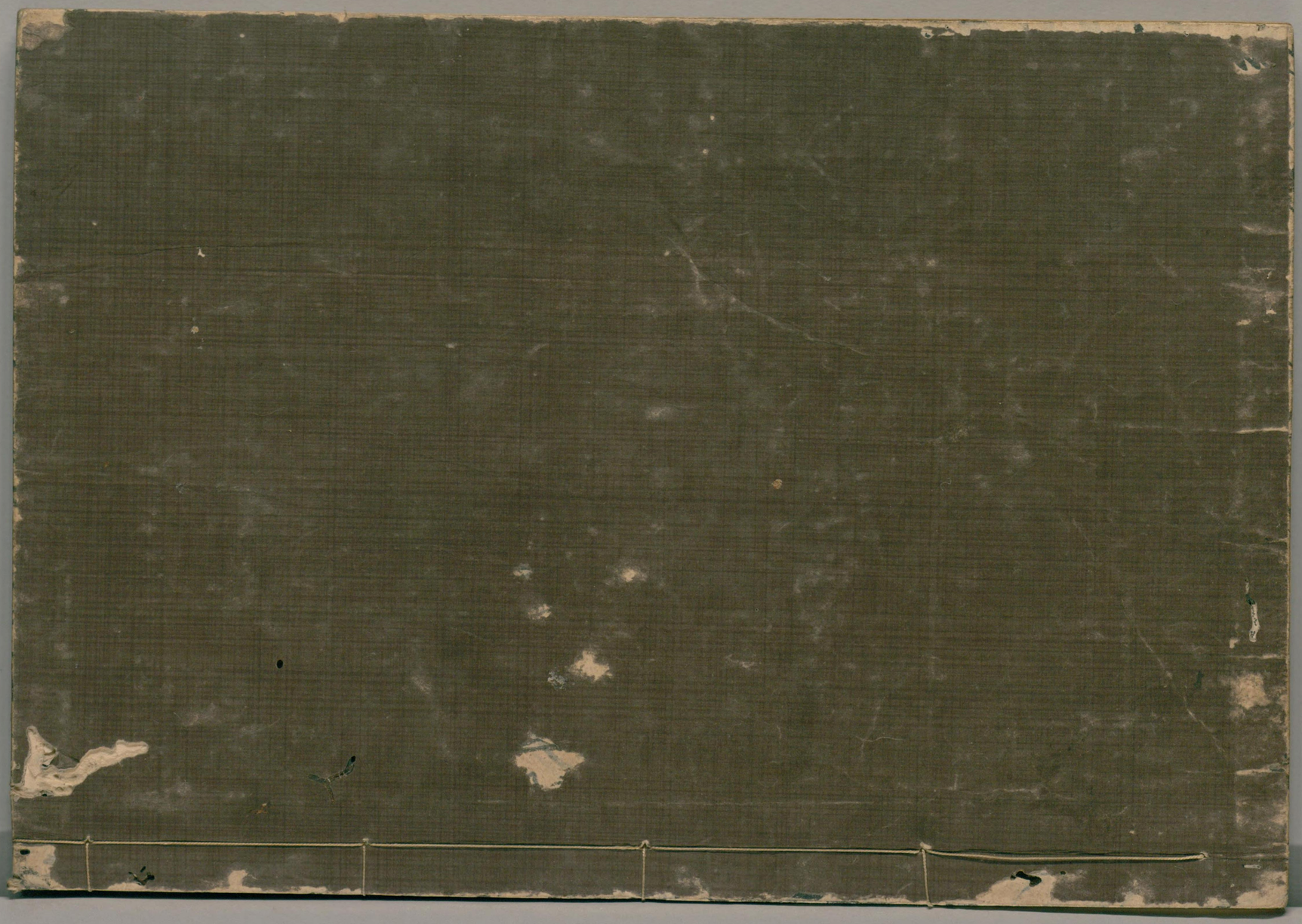
国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

特 3
1

日本一統志卷之二十五終

鴻巣村
幸田氏
藏書之記

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』請求記号 862-160
ガラス使用